

ギヤスケルとエリオット

— 『ルース』と『アダム・ビード』に見られる作家の道徳的姿勢 —

廣野由美子

1 作家像 — 「堕ちた女」と「家庭の天使」

ギヤスケル (1810-65) とジョージ・エリオット (1819-80) は、ともに 30 歳代後半に小説を書き始め、処女作から評判となって小説家としての確固たる地位を築いたという点で共通している。エリオットが最初の小説『牧師たちの物語』(*Scenes of Clerical Life*, 1858) に続き、『アダム・ビード』(*Adam Bede*, 1859) を出版して、小説家としてデビューしたとき、9 歳年上のギヤスケルのほうは、『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848) を発表して 10 年たち、すでに人気作家として名が知られていた。このとき先輩作家ギヤスケルが、エリオットに対してどのような態度を示したかを見てみよう。

『アダム・ビード』発表当時、エリオットの本名はまだ伏せられていたため、真の作者をめぐる様々な噂が流れていた。¹ ギヤスケルは『アダム・ビード』を読んで、エリオットに手紙 (1859 年 6 月 3 日付) を書き送る。その中でギヤスケルは、「マンチェスターからロンドンに来て以来、私は『アダム・ビード』の作者ではないかと疑われていますが、今までこれほどのお世辞を言われたことはありません」(Chapple 559) と述べて、敬意を表している。

その後、エリオットが、妻子ある G. H. ルイスとともに大陸へ旅行した悪評高いメアリ・アン・エヴァンズであるとの噂が流れ始めたころ、ギヤスケルは出版者ジョージ・スミスへ宛てた手紙 (1859 年 8 月 4 日付) の中で、『アダム・ビード』は、誰が書いたにせよ、崇高なすばらしい本」であると認めつつも、「ミス・エヴァンズの生き方は、最善の解釈をしても、この立派な本とは一致しないので、彼女の作品でなければと願わざるをえません」(Chapple 566) と述べている。真の作者が公表されたあと、ギヤスケルは改めてエリオットに手紙 (1859 年 11 月 10 日付) を書き、『牧師たちの物語』と『アダム・ビード』を再読したことを告げて、「これほど完璧で立派な小説を、私はこれまでに読んだことがありません」と、称賛

の言葉を送る。しかし、手紙を結ぶ前に、「あなたがルイス夫人だったらよかったのにと思います」(Chapple 592)と、一言本心を漏らしている。

ここからうかがわれるのは、まず、ギヤスケルがエリオットの作品の真価を、作者の個人的事情如何にかかわらず高く評価し、後進作家に対して謙虚な態度で、惜しみなく称賛の言葉を捧げていることである。²しかし、寛容なギヤスケルでさえ、エリオットとルイスの内縁関係は遺憾であるという気持ちを隠すことはできなかったようだ。これは、ギヤスケルの偏見を示しているというよりも、むしろ、男女の婚外関係に対するヴィクトリア朝社会の見方がいかに厳しかったかを、逆に照らし出していると見るべきだろう。たとえば、イギリスを訪れたアメリカ人チャールズ・エリオット・ノートンは、知人に宛てた手紙(1869年1月29日付)の中で、当時、エリオットが作家として敬意を払われつつも、社交界で受け入れられず、好奇心の対象になっていた様子について語っている。「彼女を訪問する女性は、世間から何と言われても気にしないような因習にとらわれない女性か、保つべき社会的地位がない女性かのどちらかです」(Haight, *Biography* 409)と述べられている通り、エリオットはレディーとして扱われていなかったことがわかる。直截な表現を用いるなら、彼女は「墮ちた女」(fallen woman)にほかならなかったのである。

したがって、ギヤスケルとエリオットには、見逃すことのできない大きな違いが一点あったと言わねばならない。それは、ヴィクトリア朝の道徳規範に照らしてみたとき、牧師の妻で四人の子供たちの母という申し分のない立場にあったギヤスケルが、典型的な「家庭の天使」だったのに対して、エリオットのほうは違反者で、社会的に傷のある身だったことである。

そこで、このような立場の異なる女性作家たちが、「墮ちた女」をどのように扱っているかという点に着目して、両者の道徳的資質について考察してみたい。本稿では、「墮ちた女」を中心に扱った作品として、³ギヤスケルの『ルース』(*Ruth*, 1853)とエリオットの『アダム・ビード』を取り上げて、比較検討する。

なお、『ルース』に対して、当時、『ウェストミンスター・レビュー』誌の編集に携わっていたエリオットが、どのような反応を示したかを、付け加えておく。エリオットは、『ルース』の発表後1カ月足らずのうちに作品を読み、ミセス・ピーター・アルフレッド・テイラーに宛てた手紙(1853年2月1日付)の中で、『ルー

ス』は、長所もあるけれど、古典的な小説として長持ちはしないでしょう。ギヤスケル夫人は鋭いコントラストや劇的効果への好みに、つねに惑わされているようです。現実生活の色合いの交じった抑えた色調には、満足できない作家のようです」と、批判的な見解を示している。他方、描写のタッチが鮮やかである点、人物描写におけるユーモアや諷刺の仕方などについては称賛し、「ギヤスケル夫人が魅力的な心の持ち主であることは確かで、彼女の小説を読むと、彼女を愛さずにはいられません」(Haight, *Letters* Vol.2, 86)とも述べている。元来批判的なエリオットは、評論「女流作家の愚劣な小説」(1856)でも、同時代の女性作家たちを辛辣に攻撃しているが、ギヤスケルについては、批評家たちから男性作家扱いにされている例外的女性作家のひとりであると述べて(“Silly Novels by Lady Novelists” 322)、別格扱いにしていたようである。⁴

小説において、「墮ちた女」を中心的に取り上げたという点で、ともかくギヤスケルが勇気ある先輩作家だったことは確かである。『ルース』の6年後に『アダム・ビード』を発表したエリオットは、ギヤスケルの影響を受けて、自分の物語に書き換えたと見ることも可能であろう。

2 ルースとヘティー

(1) 彼女たちはいかに墮ちたか

「墮ちた女」ルース・ヒルトンとヘティー・ソレルの物語を比較するにあたり、まず両作品の共通点から見てゆこう。第一に、二人の境遇は類似している。15歳で登場するルースは、すでに両親と死別し、遺言執行人によって婦人服店に住み込み奉公に出されている。ヘティーは17歳で登場するが、やはり両親と死別したあと、母方の伯父ポイザーの家に引き取られ、家事の手伝いをしている。身寄りも同性の助言者もなく、過酷な労働条件のもとで働くしか生きてゆくすべのないルースに比べれば、身内の農家で子守りやバター作りを手伝っているヘティーのほうが、恵まれている。しかし、ともに農家に生まれ、無一文の孤児で、馴染まない環境の中で孤立しがちな、世間知らずの十代の若い娘であるという点では、共通している。

第二に、彼女たちは類い稀な美貌の持ち主として造形されている。ヘティーについては、丸いピンク色の顔、長いまつげ、丸々とした腕など、魅惑的な姿態が

詳細に描かれ、その官能的な美が強調される。ことに、子猫に譬えられる彼女の愛らしさが、男性にとっていかに抗しがたい魅力であったかを、語り手は繰り返して述べている。それに対して、ルースの美しさは、ギリシャ彫刻のように整った高貴な美として描かれ、語り手はそれがセクシュアリティとは無縁のものであるように印象づける。しかし、婦人服店経営者ミセス・メイスンが、ルースの「美しい身体の曲線、人目を引く顔立ち、黒い眉とまつ毛、とび色の髪、白い肌の色」(R 11)を観察し、それらが店にもたらす商業的利益を値踏みするとき、私たちは、ルースがセクシュアリティを免れない存在であることに気づくのである。

第三に、彼女たちはともに、身分の高い男性に思いを寄せられ、破滅の道を迎えることになる。ルースを誘惑したベリンガムは、貴族の血を引く家柄に生まれ、一人っ子として甘やかされて育った 20 代前半の金持ちの青年である。彼は、舞踏会でお針子として働くルースの美貌に魅せられ、彼女を情婦にしようとする。他方、『アダム・ビード』に登場するアーサーは、大地主のただひとりの孫で、ドニソーン家の後継ぎである。彼は 21 歳の丁年を迎えようとしている金持ちの青年で、小作人ポイザーの姪ヘティーを見染め、彼女と逢瀬を重ねるようになる。彼らは純然たる悪人ではなく、誘惑された女性の目を通して魅力的な側面も描かれているが、戯れの恋に刹那的に身を任せる意志の弱いエゴイストであるという点で共通している。ベリンガムは病中、ルースに手切れ金を渡した母親の意思に従い、アーサーはアダムに強制されて、ヘティーへの別れの手紙を書くことになる。

こうして、ヘティーは 18 歳のとき、ルースは 16 歳のとき、未婚の母となり、ともに「墮ちた女」として社会から疎外される危険な運命を迎えることになる。しかし、「墮ちた女」となった原因の中に、彼女たち自らの選択が含まれていたことも、もうひとつの共通項として付け加えておかなければならない。彼女たち自身、情事に溺れて判断力を失い、しかもその恋愛感情を後々まで引きずっていったのである。

(2) 母性における相違点

このように、二人の女性が墮ちてゆく経路は似ている。しかし、その他の点では、むしろ相違点のほうが目立つ。まず、妊娠を知ったときの彼女たちの反応を

見てみよう。病に倒れたルースは、牧師ベンスン氏とその姉のもとで保護される。医者診察を受けたあとのルースの態度にについて、ミス・ベンスンは、弟に次のように報告している。

“And she [Ruth] whispered, quite eagerly, ‘Did he [the doctor] say I should have a baby?’ Of course, I could not keep it from her She did not seem to understand how it ought to be viewed, but took it just as if she had a right to have a baby. She said, ‘Oh, my God, I thank Thee! Oh! I will be so good!’” (R 118)

ルースが、自分に赤ん坊ができたかどうかを尋ねていることから、彼女がもはや性について無知な子供ではなかったことがわかる。彼女は妊娠したことを臆することなく喜び、神に感謝するのである。「私はよい人間になります」という最後の言葉からは、彼女が罪を自覚していて、母となることに救いを見出しているさまがうかがわれる。ミス・ベンスンが懸念するように、ルースは世間の見方を認識していないかに見えるが、これは、自殺を図ったあとのことであり、生まれ変わったような心境を表しているのだと解釈することも可能だろう。

他方、ヘティーは、アーサーから別れを告げられたあと、アダムと婚約するが、婚礼の日が近づいたころ、密かに旅に出る。その原因について、語り手は次のように暗示的に述べる。

After the first on-coming of her great dread, some weeks after her betrothal to Adam, she [Hetty] had waited and waited, in the blind vague hope that something would happen to set her free from her terror; but she could wait no longer. All the force of her nature had been concentrated on the one effort of concealment, and she had shrunk with irresistible dread from every course that could tend towards a betrayal of her miserable secret. (AB 328, underlines mine)

遠回しに表現されているが、ここで繰り返し述べられているヘティーの「恐怖」や「みじめな秘密」とは、赤ん坊が生まれることにほかならない。それは、未婚の母に対する世間の反応がいかなるものであるかを、彼女が予知していたことを

示していて、自然な反応であったと言えるかもしれない。しかし、ヘティーの反応は、もっと根本的な彼女の性情に根差していることが、次第にわかる。

これに先立ち第 15 章で、彼女が母性の欠如した女性であることが、予言的に示されている箇所がある。ヘティーにとって、世話をしなければならぬポイザー一家の子供たちは、「日々の邪魔者で、静かにしていきたい暑い日に、つきまどってくる、ブンブン音を立てる虫のように嫌なもの」で、羊のお産のときに面倒を見させられる「嫌な子羊よりも厄介なもの」であり、その理由は、「子羊ならば、そのうち片づけられるからだ」という。鶏や七面鳥に関しては、金銭と引き換えでなければ、「孵化」という言葉を聞くのさえ嫌で、「母鳥の羽の下から、丸い綿毛のはえた雛が覗いているのを見ても、ヘティーは何ら心を動かされず」、「雛によって儲かる金で、自分のために市で買える新しいものにしか、関心がなかった」(AB 140-41)。このくだりからは、ヘティーが人間であれ動物であれ、幼い者に対して、拒否感以外の感情を持っていないことがうかがわれる。

出産後、ルースとヘティーの違いは、いっそうはっきり顕在化してくる。赤ん坊が生まれた直後のルースの心持ちについて、語り手は次のように述べている。

It was her own, her darling, her individual baby, already, though not an hour old, separate and sole in her heart, strangely filling up its measure with love and peace, and even hope. For here was a new, pure, beautiful, innocent life, which she fondly imagined, in that early passion of maternal love, she could guard from every touch of corrupting sin by ever watchful and most tender care. (R 161)

まさに母性の発露そのものと言える愛情に溢れた幸福感が、ここには描かれている。「自分はこの子を、ほんのわずかでも悪くなりそうな過ちからも、たえず気をつけて優しく守ってやろう」という決意の通り、ルースは息子レナードを、全霊かけて慈しみ育ててゆく。それは崇高な愛情として美化されるばかりではなく、「誰かが自分と子供の間に割り込みはしないかと、ほとんど動物的な警戒心を抱く」(R 305) というような本能的側面からも描かれる。ルースは自分の過去が暴かれ、レナードの出生の秘密が知れることを恐れる日々を送りつつも、その母性愛によって再生してゆくのである。

他方、ヘティーは嬰兒殺しの罪で逮捕されるが、裁判でも自分の罪について口を閉ざし、子供を生んだことさえ否認し続ける。こうして子供の存在自体を否定している彼女には、母性愛の片鱗も見られない。死刑の宣告を受けたあと、ヘティーは牢獄で事件の経緯についてダイナに告白する。旅の道中、ある店に宿を借りて出産したこと。そのとき、「赤ん坊を片づけて、また家に帰れるかもしれないという考えが浮かんだ」こと。ここで、先に挙げた「子羊ならば、そのうち片づけられる」という箇所で用いられているのと同じ「片づける」(get/got rid of)という表現が用いられていることが、注意を引く。そのあとヘティーは、赤ん坊を捨てようと、森に出かける。「赤ん坊に対する気持ちは、よくわからなかったけれど、憎らしいような気がして、首にかかった重いおもりのようだった。赤ん坊の泣き声が体中に響いて、小さな手や顔を見る気もしなかった」と、彼女は述べる。木の幹に腰をおろしていたとき、ヘティーは「突然、かしの木の下に、小さな墓のような穴を見つけて」(AB 406-07)、とっさに赤ん坊をそこに置き、草や木切れをかぶせておこうと思いつく。ヘティーは、殺意はなかったと主張しているが、それが弁解のように聞こえるのは、「片づける」とか、邪魔な「おもり」とか、「墓穴」というような表現に、潜在的な殺意が仄めかされているからである。赤ん坊に草や木切れをかぶせるというのも、隠蔽し埋葬する行為のように見える。こうしてヘティーは、子殺しという最も母性とかけ離れた行為によって、破滅する。恩赦によって死刑を免れ、ヘティーは島流しとなるが、刑を終えて帰国する途中に病死し、作品で再生の機会が与えられることはない。

ルースのほうは、子育てのみならず、職業をもつことによっても、再生してゆく。はじめはブラドショー家の家庭教師になり、過去が暴露され解雇されたあとは、職探しに苦労するが、最後は看護婦となって奉仕することにより、社会的評判を回復するのである。これらの職業も、性質上、母性の発展した形として捉えることができるだろう。ルースも最後は死ぬが、それは看護中に熱病に感染したための殉職で、ヘティーの死とはまったく意味が異なる。

(3) 彼女たちはいかに描かれているか

このように、ルースとヘティーは、母性の有無という点で対照的に描かれている。しかし、これは見方を変えれば、ギヤスケルもエリオットもともに、「墮ち

た女」を描くさいに、彼女たちを「母性」という観点と結びつけているということである。つまり、身を落したことの結果とも言える非嫡出子に対して、彼女たちがいかなる態度をとったかによって、その人間性の是非を問うというやり方をとっている点では、両作家の方法は共通しているとも言えるだろう。最大の違いは、ストーリー展開上の違いよりも、むしろ、彼女たちを造形するさいの、作者の描き方の違いにあるのではないだろうか。

ギヤスケルの語り手は、ルースの清らかさに対して、疑いを差し挟むことはほとんどない。ルース自身は過去の過ちを恥じ、悔恨し続けているが、語り手は決して彼女を責めることがない。「ルースがいかに若く純真であったか、そして母親がいなかったということを、思い出してください」(R 56)というように、読者に向かって弁護している。また、再生したあとのルースについて語るときには、敬意と称賛がこめられている。たとえば、看護婦としてのルースを描いた箇所から、一例挙げてみよう。

Her [Ruth's] ways were very quiet; she never spoke much. . . . And yet Ruth's silence was not like reserve; it was too gentle and tender for that. It had more the effect of a hush of all loud or disturbing emotions, and out of the deep calm the words that came forth had a beautiful power. She did not talk much about religion; but those who noticed her knew that it was the unseen banner which she was following. The low-breathed sentences which she spoke into the ear of the sufferer and the dying carried them upwards to God. (R 391)

ここで描かれているルースは、気品があり、慈愛に溢れ、苦しむ人々を文字通り「神へと引き上げる」人物で、聖女のような趣さえ与えられている。最後に彼女は、熱病患者たちの看護に尽くし、命を捧げる。このように、ギヤスケルはルースを、他者中心の自己滅却的な人物として美化している。美化するということは、人物を称賛者の目によって外側から描いていることを意味する。

それに対して、エリオットは、ヘティーを徹底的に内から描き、彼女がいかに自己中心的な狭い心の持ち主で、ナルシストであるかを、あぶり出す。最初に登場したときから、ヘティーは、家具の表面に映った自分の姿を楽しそうに眺めて

いる (AB 67)。その後も、アーサーから贈られたイヤリングをつけて微笑みながら、鏡に映った自分の姿を覗きこむさま (AB 227) など、自己陶酔的側面が繰り返し描かれている。また、語り手はたとえば次のような調子で、ヘティーの属性について説明している。

And Hetty's dreams were all of luxuries: to sit in a carpeted parlour and always wear white stockings; to have some large beautiful ear-rings, such as were all the fashion; to have Nottingham lace round the top of her gown, and something to make her handkerchief smell nice, like Miss Lydia Donnithorne's when she drew it out at church; and not to be obliged to get up early or be scolded by anybody. (AB 90-91)

ヘティーはただ物質的な贅沢と怠惰、虚栄心を満足させることのみを望み、それらをかねてくれる可能性のあるただひとりの男性としてアーサーとの結婚を夢みて、アダムに対しては何ら心を動かすことがなかった、というように、語り手はヘティーの内面から彼女の心の動きを分析してゆく。

したがって、ヘティーが「墮ちた女」となり、さらには嬰兒殺しの罪を犯したのは、彼女自身の内面の原因から導き出された結果であるということ、エリオットは暴いているのだ。アダムが、ヘティーは無垢で、アーサーにのみ責任があると主張するとき、ヘティーの内面を知っている読者には、彼女の外観の魅力に欺かれているアダムが、かえって弱点を晒しているように見えるのである。

3 ギヤスケルとエリオット —— 相違点から接点へ

では、「墮ちた女」の描かれ方が、ギヤスケルとエリオットとではなぜこのように異なるのか、その原因について考えてみよう。第一の理由は、言うまでもなく、両作家の道徳的資質の違いそのものに根差している。いずれもヒューマニズムの精神と深い洞察力を具えているが、個人の過ちを扱うとき、ギヤスケルは許しへと向かい、エリオットはどこまでも厳しく追求する傾向がある。ただし、そのような基本姿勢にもかかわらず、エリオットのほうは、やや作作的に物語を穏やかに収束させているの対して、ギヤスケルのほうは、女主人公のドラマチックな死と、その犠牲に値しない男の軽薄さを描くことによって、よりリアリティを

添えた終結の仕方をしていることは、興味深い。

第二に、物語におけるスタンスの違いの背後に、さらに作家自身の人生の違いを見ることができる。言い換えると、作者自身の人生上の必要から、それぞれの作品が生まれたと考えることもできるのである。

エリオットの場合は、自分自身が「墮ちた女」と見られる危険を克服することが、作家となるための出発点として、喫緊の問題であった。それには、「墮ちた女」に暖かい眼差しを向けていたのでは、読者にかえって自己弁護ととられ、逆効果になる。エリオットは、自分とはほど遠い「墮ちた女」ヘティーを描き、自分はヘティーとは異なり、道徳的問題に関して真摯な人間であること、自分とルイスの関係は、道徳の本質的な意味において正しいのだということを、証明する必要があったのだ。彼女は『アダム・ビード』だけではすまわず、さらに『フロス河の水車場』(*Mill on the Floss*, 1860)でも、共同体から疎外された女性のテーマを繰り返して追求し、ここでは自らを女主人公に重ね合わせ、マギーが最後に洪水で死ぬという結末へと導き、受難の物語を書いている。

それに対して、ギヤスケルは、苦しんでいる他者を助けることにこそ、自らの作家としての使命があるという考え方から出発していたようだ。作品の中でベンソン氏は、「身を落とした女性も、心傷ついた人として扱うべきであって、救いようのない者として見捨てたりしてはならないというのが、神の意志である」(R 351)と述べているが、ここにはギヤスケル自身のメッセージが読み取れる。その信条を実践するために、彼女は「墮ちた女がイギリスの地域社会に受け入れられ、立派に生きてゆく」(Flint 23)という、これまでになかった物語を書こうとしたのだろう。

ギヤスケルにとって『ルース』を書くことは、自分の道徳性を証明するためではなく、逆にそれを世間から疑われる危険に身を晒すような試みだったのである。アン・ロブソンに宛てた手紙(1853年1月27日前付)の中で、ギヤスケルは、『ルース』が非難されることを予想し、「人々の発言に、私がいかに身の縮む思いをしているかは、言葉では表せない」と、辛い心境を明かしている。「たとえて言うなら、私は木に縛り付けられて矢を射られている聖セバスチアンの心境なのです」(Chapple 220-21)と、彼女は自分を受難者として位置づけている。実際に身を落した経験のないギヤスケルにとっては、「墮ちた女」を弁護する作品を書くだけ

でも、社会の日蔭者になるかのように、恐ろしいことだったのである。⁵

したがって、エリオットとギヤスケルが、同じ問題について、別の方向から勇気を奮って作品を書いたということに、二人の接点を見出すことができるだろう。しかし、本質的な類似点は、題材よりも、むしろ「他者への共感」というテーマにこそあると、筆者は考える。『アダム・ビード』は、つねに正しく、自分にも他人にも厳しい人間アダムを主人公とした作品である。作品のはじめで、アダムの父親が溺死したさい、彼は自分が父に対して、生前、厳しすぎたことを後悔する。しかし、彼が本当の意味で寛容になれたのは、婚約者ヘティーが嬰兒殺しで有罪になったときである。彼は、自分自身が苦悩を経験したことを通して、初めて他人の苦しみが理解できるようになったのだ。

他方、『ルース』におけるブラドショー氏は端役的な人物であるが、ヴィクトリア朝道徳を重んじ、自分が最も正しいという立場から、過ちを犯した人間を徹底的に弾劾する人物の典型として、戯画的に描かれている。彼は、ルースの過去を知ったとき、真っ先に排斥し、彼女をかばうベンスン氏とも絶交する。しかし、自分の息子リチャードが罪を犯したと知ったとき、初めて苦悩を経験し、苦しみをへて、最後にベンスン氏と和解し、ルースへの評価も改めたのだった。また、ジェマイマは、ファーカー氏をめぐって、ルースを恋敵として憎み嫉妬するが、その苦しみの経験ゆえに、過去が発覚し追放されたルースを、父ブラドショーからかばい、彼女の味方になる。このように、自分自身の苦悩を通して、他者への共感を拡大してゆくというテーマが、二人の作家を密接につなぐ太いパイプであり、かつ両作家を、今日まで読まれ続ける小説家とする重要な要素のひとつであると考えられるのである。

さらに付け加えると、エリオットは、自分が愚かな美人ヘティーではないことを明らかにしつつ、理想の女性として美化して描いているダイナに、むしろ自分を重ね合わせたいという潜在的願望を抱いているように思われる。ダイナは、アダムの母リズベスなど、弱っている人を看護し、母性豊かな人物で、結末でも、二人の子の母として姿を現す。弱者を助け、信心深く、自己滅却的な母性的人物——というと、ダイナはルースと重なり合う属性をもった女性であることに気づく。すると、ダイナという人物像を通して、作家エリオットと女主人公ルースという、まるでイメージの違う二人の間にさえ、意外にも接点が浮かび上がってく

ることが発見できるのである。

以上、比較考察してきたように、ギヤスケルとエリオットは、社会的立場や道徳的資質、芸術的方法、そして人間的なタイプや性格など、様々な点で隔たりのある作家だったということがわかった。しかし、その一方で、二人がしばしば、意外な点で接近を示すことも、見てきた通りである。エリオットとギヤスケルは直接会ったこともなく、親密な関係ではなかった。しかし、時には遠く、また時には近い、その距離を保ちつつ、互いに認め、刺激を与え合いながら、ともにアマゾン族⁶のごとく、勇敢に戦う女性であったという点では、月並みな表現ではあるが、いわば戦友のような関係だったと言えるのではないだろうか。

注

※本稿は、日本ギヤスケル協会第22回大会(2010年10月3日、於実践女子大学)におけるシンポジウム「エリザベス・ギヤスケルと同時代の女性作家たち」での発表をもとに、加筆修正したものである。

- 1 「エイモス・バートン師の悲運」、「ギルフィル氏の恋物語」、「ジャネットの悔悟」は、1857年1～11月に、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』に匿名で発表されたが、1858年に『牧師たちの物語』として2巻本で出版され、そのさい表題頁にジョージ・エリオットという男性の筆名が記された。『アダム・ビード』も同じ筆名を付して、1859年2月に3巻本で出版されたが、ジョウゼフ・リギンズなる人物が真の作者であるという噂が優勢になるに及んで、エリオットは同年7月に実名の公表に踏み切った。
- 2 これに対して、エリオットもギヤスケルに礼状(1859年11月11日付)を書いて感謝を示している。その中で彼女は、1857年、『牧師たちの物語』の執筆中に読んだ『クランフォード』(1853)、および1858年、『アダム・ビード』執筆中に再読した『メアリ・バートン』に共感を覚えたと述べている(Haight, *Letters*, Vol.3 198-99)。
- 3 ギヤスケルは、『ルース』に先立ち、『メアリ・バートン』のエスタや短編「リジー・リー」(1850)のリジーのような「墮ちた女」も登場させている。
- 4 エリオットが例外的女性作家として挙げているのは、ハリエット・マーティ

- ノー、シャーロット・ブロンテ、ギヤスケルの3名である。
- 5 C・L・クルーガーは、ギヤスケルが、『ルース』で不適切な題材を扱ったとして、激しい攻撃を受け、「自分の作品の中の堕ちた女と同一視された」と述べている (Krueger 157)。
- 6 ギリシャ神話で、カフカス山や黒海沿岸のスキタイにいたとされる勇猛な女武人族。『克蘭フォード』の冒頭は、“In the first place, Cranford is in possession of the Amazons . . .” という有名な一節から始まる。

引用文献

- Chapple, J. A. V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs Gaskell*. 1966; rpt. Mandolin, 1997.
- Eliot, George. “Silly Novels by Lady Novelists.” *Essays of George Eliot*. Ed. Thomas Pinney. London: Routledge and Kegan Paul, 1963.
- . *Adam Bede*. Ed. Carol A. Martin. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Flint, Kate. *Elizabeth Gaskell*. Writers and Their Works Series. Plymouth: Northcote House, 1995.
- Gaskell, Elizabeth. *Ruth*. Ed. Alan Shelston. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Haight, Gordon S. *George Eliot: A Biography*. Oxford: Oxford UP, 1968.
- , ed. *The George Eliot Letters*. 9 vols. New Haven: Yale UP, 1954-78.
- Krueger, Christine L. *The Reader’s Repentance: Women Preachers, Women Writers, and Nineteenth-Century Social Discourse*. Chicago and London: U of Chicago P, 1992.

(京都大学大学院教授)

Abstract

Gaskell and Eliot: Their Respective Moral Stances in *Ruth* and *Adam Bede* (Symposium: “Elizabeth Gaskell and Her Contemporary Women Novelists” 3rd Oct. 2010)

Yumiko HIRONO

Although Elizabeth Gaskell and George Eliot shared similar careers as contemporary women novelists, one cannot ignore a differing aspect between the two: Eliot was viewed as “a fallen woman” in the Victorian society because of her illegal marriage to G. H. Lewes, while Gaskell, a minister’s wife and a mother to four children, was respected as “an angel in the house.” This paper compares the moral stances and literary characteristics of these novelists in contrasting social positions, by focusing on how they represent the fallen women in their respective works: *Ruth* and *Adam Bede*.

We find a few common characteristics when considering the situation and process in which the two heroines, Ruth and Hetty, become fallen women. However, the difference between them in other characteristics is more remarkable. First, Ruth builds a new life by becoming a mother, whereas Hetty ruins herself owing to her fatal lack in maternity. Second, both writers’ characterization of their heroines differs in artistic nature: Gaskell idealizes Ruth as an altruist by describing her externally, while Eliot analyzes Hetty’s inner egoism.

Nevertheless, an important connection can be found between Eliot and Gaskell: the former was under pressure to prove herself against the reproach of being a fallen woman, while the latter’s social position began to weaken when she defended a fallen woman in fiction. In other words, both of them approached the same new subject but in different ways, and pursued the common theme of sympathy in their work.